

口頭発表する「内容」をもたせるための指導法 ー日本語初級レベルでのアンケート調査プロジェクトー

三浦 香苗

要 旨

初級日本語集中コースでは、一般日本語の授業と並行して口頭研究発表プロジェクトを行い、コース修了時にその成果を留学生が発表する。それは、自分が興味をもった小テーマについてアンケート調査をし、その結果を分析して結論を導き、それを聴衆の前で口頭発表するものである。

このプロジェクトは、発表の最も大切な点である「発表すべき内容」において他の諸機関で行われている修了発表と異なる独自性をもっている。それは、第一に、知識の紹介発表ではなく、研究発表である点である。第二に、発表の内容を高めるために、データの単なる記述に留まらず、統計的手法を用いた分析を行っている点である。

本稿は、発表すべき内容をもたせるため、次いで、その内容を発表の形式に整えるために段階的に行っている指導法について具体的に記述し、専門への橋渡し教育に関心をもつ方々のご批評を仰ぐものである。

主として次のことについて述べる。発表すべき内容をもたせるために：準備段階、テーマを決めて研究計画を書く、アンケートの質問を作りアンケート調査をする、アンケートの答をデータ入力する、データを分析し結論を導く。内容を発表の形式に整えるために：発表のアウトラインを作る、発表用スライドを作る、発表原稿を書く。

【キーワード】 発表の内容、発表の形式、口頭発表、アンケート調査、データ分析

I . 口頭研究発表プロジェクトの独自性

昨今は多くの大学の初級日本語集中コース等の修了時にスピーチ発表が行われているが、最も大切な点である「発表すべき内容」において、筆者が担当する日本語研修コースの口頭研究発表プロジェクトとは異なっている。本プロジェクトの独自性は、知識や意見の紹介発表ではなく研究発表である点と、データの単なる記述に終わらず統計的な分析を行って発表の内容を高めている点にある。

1. 独自性 1：知識や意見の紹介ではなく、研究発表である

a. 研究発表であることの意義

他大学のスピーチの内容は、自国の文化の紹介や日本に関する意見発表であることが多い。それよりも進んだものとして、自分の専門について発表することが行われている場合もある。日本語によるプレゼンテーション能力の涵養の点で、筆者は、これらの活動の意義を高く評価するものである。

一方、本コースの修了発表は、自分で決めた小テーマについてアンケート調査をし、その結果を分析して結論を導き、発表するものである。すなわち、テーマは卑近であっても、データと話すこととの整合性が問われる研究発表である。難易度でいえば、このような研究発表の方が、発表する者と指導する者の双方にとって遥かに難しい。しかし、研究留学生にとって、より有用で価値ある訓練であると考え、敢えて初級集中コース中のプロジェクトとして行っている¹。(その概要を資料1に、発表題目を資料2に示す。)

次に、専門課程での研究発表に日本語が必要かという点について述べる。本コース修了生（研究留学生と教員研修留学生）に対して筆者らが行った聞き取り調査²(早川他2002)によると、北陸地方の大学院へ進学した留学生（研究生の身分を含む）が行う専門課程での研究において、口頭発表（ゼミ発表も含む）した者の70%が、論文・レポートについては、書いた者の約50%が日本語を使用している。また、金沢大学で留学生を指導している教官194名に行った質問紙による調査(三浦他1999)によると、留学生の口頭発表を指導する際に指導教官が問題だと認識しているものは、「日本語力不足」が他のものを引き離して1位であり、文系・理系の60%以上の教官が指摘し、文系・理系の差も学部によるばらつきも見られなかった。アンケート調査では単に「日本語力不足」ということになっているが、筆者はこれを、「日本語を使って研究発表をする力が不足」していることだと考える。このことから、留学期間の短い留学生のために、単なる自分の見解の発表ではなく、データに基づいた日本語による研究発表の練習を初級研修コース在籍中に行う必要があると考える。

1 平成7年（1995）後期の第1期生から口頭発表プロジェクトを実施している。平成15年（2003）後期で第17期となる。平成10年（1998）前期にそれまでの自作教材を冊子『5ヵ月で口頭発表』にまとめた。指導方法には年々改良を加え、平成15年（2003）度からその試作版『Practice Public Speaking』（仮題）も併用している。

2 分析の対象人数は28名と少数であったが、コース受講中の成績や身分等の点でコース修了者全体と違いがあると認められず（カイ二乗検定、F検定）、その分析結果はコース修了生全員について一般化できるものと考えられる。

b. なぜアンケート調査か

研究発表を日本語初級段階で行うとなると、日本語の文献を読んで分析するには留学生の日本語力が不足している。そこで、新しいデータを自分でとって分析するという方法をとることになる。そのデータは、生の若者言葉を録音してくるといった、特別な知識、技術、方法論、時間を必要とする実態調査では手に余る。また、たとえば、大学食堂で人気のある料理をインタビュー調査によって調べるとすると、相当な日本語力と時間が必要となる。しかし、質問紙による意識調査なら、比較的短い時間で大学キャンパス内の多数の学生に対して行うことができ、幸いにしてデータ分析の方法を指導できる教師もいる。以上のような理由により、大学キャンパス内の学生の意識を調べるアンケート調査を選んだ。

また、アンケート調査に関しては、多くの日本語コースで総合的学習として取り入れた活動が行われているにもかかわらず、アンケート項目の作り方、その分析のしかたなどに注意が払われていないようである。それは、日本語教師の中で、アンケート調査は単に日本語教育のための方便であり、わざわざその方法を教えるようなものではないという意識があるのではないだろうか。更に、データの扱いは、数（パーセンテージ）を述べるだけで十分で、それ以上の分析に余分な力を注ぐようなことはしたくないし、またその方法を知らないという理由があると思われる。

筆者は、アンケート項目の作り方や分析のしかたの指導こそ、「発表すべき内容」にとって重要であると考え。教師自身がその方法を知らない場合は、勉強して、留学生とともに成長すればよいと思う。

2. 独自性2：記述から分析へと発表の内容を高める

本発表プロジェクトのもう一つの特徴は、アンケート結果を単に記述する（パーセンテージなどを述べる）だけでなく、統計的手法を用いて分析することにより、発表の内容を高めている点にある。Ⅲ－5－「データ分析」の項で、その手順を述べる。

Ⅱ. 口頭発表を可能にする必要条件と先行研究

1. 必要条件

留学生の口頭発表を可能にするために必要な条件を考えると、以下のことが挙げられる。

- ① 発表すべき内容をもっていること
- ② 発表内容を発表の形式に整えることができること

- ③ 語彙・表現を調べ、日本語の文を作ることができること
- ④ 口頭発表のためのレジュメや視覚資料（スライド、OHP など）作成ができること
- ⑤ 聴衆に理解可能な発音ができること
- ⑥ 口頭発表のマナーが身についていること

上記の諸点で最も重要なものは、①であり、次いで②である。その他の項目は日本語力と技術力とマナーであり、本コースでは通常の日本語の授業（コンピュータ授業を含む）の中で、それらを段階的に取り入れることにより、解決している。

2．先行研究・教材

先行研究・教材については、必要条件として挙げた上記のものの中で①と②を中心にみることにする。また、留学生を対象としているか、日本語初級の者にも使えるか、アンケート調査を扱っているかについても検討する。

a．専門日本語に関する研究・教材

留学生の専門領域で使われる日本語の語彙・表現、文型、談話構造の研究などは近年行われるようになり、日本語教育学会誌『日本語教育』82号（1994年3月）は、専門分野別日本語教育の特集を組んでいる。また、専門日本語教育研究会誌『専門日本語教育研究』（1999創刊）には、かなりの数の研究論文・報告がみられる。しかし、日本語教育学界全体から考えると、なお少数派であろう。

教材に関しては、特定分野の読解教材は各大学の留学生センターなどで作られている。市販されているものもある。理工系研究報告文の作文技法教材（米田2001）、論文を書くための教科書（浜田他1997）などは、研究論文やレポートの日本語表現・文型・語彙だけでなく、研究論文の構成や論文を書くための方法も盛り込んでいる優れた指導書である。ただし、これらは中上級者向けであり、しかも口頭発表用のものではない。

b．口頭発表に関する研究

「口頭発表／プレゼンテーション／スピーチ」に関する論文や学会発表は、日本語教育学会誌にも日本語教育学会大会予稿集にも、少ない。日本語初級レベルの口頭発表に関しては、筆者らの発表のみである（三浦他1998－b）。ただし、紀要レベルの論文はもっとあるだろうと思われる。

c. 一般向けの口頭発表参考書

市販されている口頭発表（プレゼンテーションとよぶ場合が多い）のための参考書を見てみると、留学生向けのものは少なく、日本人向けの、しかも営業や企画説明などのものが多い（例：富士ゼロックス ドキュメントマネージメント推進室編1989）。学会発表のためのものもある（例：川口他1993）が、日本人向けである。そして、これらの多くのものが上記の「④口頭発表のためのレジュメや資料作成」技術の説明に最も多くのページを割いている。次いで「②発表内容を発表の形式に整える（説得力のある構成にする）」や「③語彙・表現を調べ、日本語の文を作る（わかりやすい文を作る）」ための指針があり、発音やマナーに関する短い注意書きや、英語のプレゼンテーションをする上での心構えや英語そのものについての注意があるという構成であり、「①発表すべき内容」は、これらの本の読者がすでにもっていることを前提としている。

d. 留学生向けの口頭発表教科書

留学生向けの口頭発表の教科書は、筆者の知る限りでは二冊が市販されていて（東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編1995、産能短期大学日本語教育研究室編1996）、「①発表すべき内容」を留学生にもたせるための解説、例示、練習などを与えている点で、上記の日本人向けのものよりも留学生のために役立つ。ただし、これらは日本語中上級者向けであり、初級者にはとうてい使えない。また、資料を読んで整理し考察することによって「発表すべき内容」を得るタイプのものであり、自分で行うアンケート調査の結果を分析するものではないという点で、筆者の行うプロジェクトとは異なっている。

e. アンケート調査用教材

次に、アンケート調査を行うための参考書（山下・小川1994）を見てみると、インタビュー調査（アンケート用紙による調査にも応用できる）のための事前のインプットやインタビュー後のまとめなどがあり、総合学習的教材としてよく工夫されている。しかし、インタビュー項目に関しては、すでに例が載せられている。つまり、学生に自分で考えさせてインタビューの質問や答の選択肢を作らせるための指導は、ない。また、自分で行うアンケート調査の結果を分析するものでもない。

f. 留学生用日本語コンピュータ教材・研究

留学生に日本語でのコンピュータ・リテラシーを身につけさせるために、コンピュータのいろはから始めて、文書作成、インターネット利用、プレゼンテーション用スラ

イド作成などを丁寧に指導した教材がある(富山大学留学生センター編2002)。また、留学生のプレゼンテーション支援のためにパワーポイントのスライドなどの視覚効果をもつ表現の特徴を研究したもの(深澤2003)などの研究も行われている。

「④口頭発表のためのレジюмеや視覚資料(スライド, OHP など)作成」のためには、これらの研究は欠かせないものであろう。また、日本語初級でコンピュータが得意でない留学生には一般の日本人用の説明書は使えないため、上記教材のような詳しく丁寧に指導が可能なものは有用である。ただし、これらはコンピュータ・リテラシーのためであって、「①発表すべき内容」のためではない。

g. 文章作成技法の著書

『理科系の作文技術』(木下1981)を開いて文献欄を見ると、木下氏以外の著者による1970年代の理系学術論文の書き方についての著作はかなりの数にのぼる。2004年現在、学生の論文やレポート作成能力を養うための参考書が大学の書籍売り場に並んでいる。『文章の作成技術』(樺島1992)は、学術論文に限定せず、よい文章を書くに到るための発想の方法、文章の構成、文章表現、文章作成支援システム(ワープロソフト)の方法等を詳しく述べている。これらは、著名な小説家等による「うまい」文章のための論に比して、科学的で客観的な文章を必要とする大学生に有益な本である。しかし、いずれも日本人向けであり、日本語力の低い留学生の利用には適さないだろう。

h. プレゼンテーション能力向上のためのワークショップ

東京農工大学で行われた第1回ワークショップの報告書(東京農工大学留学生センター 越前谷1999)では、理系専門教官による論文作成指導の添削の具体例が示され、問題点の考察が報告されている。第2回ワークショップ報告書(同2001)では、複数の日本人学生に同一の小課題を与えてOHPを作成させ、教官の指導を経て、プレゼンテーションに到る過程が報告されている。このような試みは画期的なものであり、理系専門教官による研究発表技術の指導法を概観することができる。また、よいプレゼンテーションとそのための適切な文章表現の指導法を目の当たりにしたという点で、日本語教育の側からも学ぶところが多い。

この報告書は、「②発表内容を発表の形式に整える」と「④口頭発表のためのレジюмеや視覚資料作成」の指導の具体例を示しているが、「①発表すべき内容」は、前もって与えられている。

以上、研究発表に関連するいくつかの先行研究を示した。

それをまとめると以下のようなものである。「④口頭発表のためのレジュメや視覚資料（スライド、OHP など）作成」に関しては多くの本があり、「③語彙・表現を調べ、日本語の文を作る」ための研究も「②発表内容を発表の形式に整える」ための方法もかなり発表されている。しかし、「①発表すべき内容」をもつための方法に関するものはごく少ない。しかも、それに到るための方法やアンケート調査の方法はある程度示されていても、日本語能力の高い者にしか適さないものである。

そこで、「①発表すべき内容」を得て「②発表内容を発表の形式に整える」ための方法を、日本語初級の留学生指導という観点で研究することは意義があると考える。

Ⅲ．口頭発表する留学生に何が求められるか

ここでは、発表のために最も重要な「内容」をもたせるために本コースで行ってきた指導法について述べる。それは、以下の段階を踏む。

- 1．準備段階
- 2．テーマを決め、研究計画を書く
- 3．アンケートの質問を作り、アンケート調査をする
- 4．データを入力する
- 5．データを分析し、結論を導く

口頭発表用教科書は、本留学生センターの『五ヶ月で口頭発表』と改訂試作版『Introduction to Academic Presentation Practice』（仮題）を使っている。

1．準備段階

難度の低いことから始めて、徐々に様々な角度から準備を進める。そのために、コース開始後1ヶ月半ほどたった頃から、以下のことを行う。

- a．発表に必要なことばや表現、すなわち、データを扱うときに必要な表現（数字、比較の表現、グラフの読み方など）や、段落の作り方、発表のメリハリのための表現（まず、次に、最後になど）を練習しておく。
- b．「日本の地理」「私の町」などの簡単な読み物を読み、その後、「私の国」について書く。
- c．コンピュータの授業で、発表用ソフト「パワーポイント」スライドの作り方、写真などの取り込み方を実習し、「私の国」の発表用スライドを作る。
- d．日本人学生との共同活動 votak³の時間、大学共通教育の「日本事情」⁴の時間、ラ

ンチョンセミナー⁵などで、多勢の聴衆を前にして「私の国」を発表する。

e. 教室内で簡単なアンケート調査の練習をする。

f. キャンパス外で観光客などにアンケート調査をし、その結果をまとめてクラスで発表する。

2. テーマを決め、研究計画を書く

留学生に自分の研究テーマをもたせるために、テーマの絞り方を教科書に沿って考えさせる。同時に、日本事情的な時間を設け、日本人論で一般的に言われていることなどを読み（日英対訳）、自分の観察から出てきた日本人の習慣や行動に対する疑問と比較してクラス内で討論し（英語を使うことが多い）、テーマを絞るという作業を行う。

テーマを絞った後に、研究計画を書く。何をどんな目的でどこまで明らかにするか、どんな方法をとるかなどを書く。（英語も可）

研究が不得意な留学生でも、テーマを絞ること、研究計画を書くことは、大概の者がさほど苦勞せずにできる。

3. アンケートの質問を作り、アンケート調査をする

次いで、アンケートの質問を作る。適切な質問の作り方⁶や答の種類⁷を学び、あとの分析のことを考慮に入れて自分のアンケートを作っていく。この段階で良いアンケートを作ることができれば、プロジェクトの半分はクリアしたことになる。

アンケートの質問作りは簡単ではないが、何を知るためにアンケートを行うかがわかっている留学生の場合、質問を作るにあたっての留意点を習ったあとなら、かなり良い設問ができる。そうでない留学生も、オサマさんの例⁸を習うことによって、要領を会得するスピードが速まった。

3 Volunteer Tutors' Association of Kanazawa University の略である。日本語研修コースの授業の1コマを使って、日本人と留学生の共同活動を行っている。

4 筆者が担当する学部学生の教養の科目。日本人学生と留学生のディスカッションを行う。

5 学部学生の共通教育として昼休みに行われるセッション。教師や学生が20分間の講義や発表を行う。

6 質問の作り方：誘導的な質問をしない、抽象的にきかずに具体的にきく、一つの質問で二つのことをきかず段階的に質問する、など。

7 アンケートの答には、選択肢を選ぶ答と自由記述、質的回答と数量的回答があり、答の種類によって分析方法も異なることなどを学ぶ。

8 オサマさんは、教科書『五ヶ月で口頭発表』の改訂版『Introduction to Academic Presentation Practice』（仮題）の中に、具体例として出てくる元受講生で、『五ヶ月で口頭発表』に沿って自分のプロジェクトを進め、時折のアドバイスを受けただけで立派な口頭発表を行った留学生である。

留学生が作った質問が適切でない場合、なぜよくないかを、合目的性、質問それ自体の明確さ、得られるであろう答の分析の難易度の予測などの点から検討させて、質問を直させる。その質問をパソコン入力し、美しいレイアウトでA4用紙一枚に仕上げさせる。

アンケート調査は、キャンパス内で行うことが多い。それは、金沢大学の学生の意識調査をしたい留学生が多いためである。各留学生が最低でも50人、できれば100人程度に対して行う。知らない日本人学生に話しかけ、アンケート用紙を手渡して記入してもらっただけでも、日本語を使った社会勉強になっている。

4. アンケートの答をデータ入力する

データ入力ソフトはエクセルを使用する。コンピュータ授業で前もってエクセルの使い方を導入しておくが、コンピュータの扱いが得意でない留学生にはそれだけでは十分ではないため、教師のパソコン画面をプロジェクターに映しながら例を見せる。あとで分析しやすいように考えた枠の作り方、データの扱い方の例を示し、各自に自分の枠を作ってデータ入力させる。

データ入力は難しくない作業であるが、コンピュータに慣れていない一部の留学生には相当骨の折れることである。入力の仕方が悪いと分析の際に困ることになるので、よくチェックしなければならない。

5. データを分析し、結論を導く

エクセルに入れたデータを分析ソフトを使って分析し、結論を導く。この部分は、最も重要であり、多くの留学生にとって困難ではあるが、この経験が後の研究生生活において必ず役立つであろうと考える。指導に当たる教師にとっても苦労が多い。

[データ分析ソフト]

データ分析の方法は、データ入力の場合と同じく、教師がプロジェクターを使って実演して見せたあと、各自が分析作業に入る。分析には2003年度までは分析ソフト「スタッドビュー Stat View」の日本語版または英語版を使用していたが、2004年度からは、エクセルとエクセル統計を使用する予定である⁹。

9 スタッドビューは使い慣れれば非常に使い勝手が良いが、製造中止になったことと、比較的高価であること、要領をつかむのに時間がかかること、あまり一般的でないことなどの理由により、分析ソフトとしての使い勝手は悪いが一般に普及しているエクセルを使うことにした。

[データ分析]

分析は度数分布，カイ二乗検定，t 検定，相関係数と回帰分析の4つの基本的方法を用いて行うよう指導する。その際，各質問の回答が「数字のデータ」か「カテゴリーのデータ」かを考えるようにする。データの質によって用いられる分析方法が異なるからである。

a．質問ひとつずつの分析

・度数分布

各質問の中でどのように答えた人が何人という値（度数）を調べる。データは「数字のデータ」でも「カテゴリーのデータ」でもかまわない。

分析ソフトを使って，年齢別の人数や，答の選択肢別の人数／パーセンテージを一瞬にして出すことができる。たとえば，学生の授業以外の1日の勉強時間が，1時間未満は20%，1時間以上で2時間未満は40%，2時間以上で3時間未満は30%，それ以上が10%というような数字を出すことができる。

ここまでは，分析の不得意な留学生も問題なくできるが，これは，単なる数の記述である。数の記述以上のことができるように，以下の分析方法を簡単な例を使って導入し，練習させ，必要に応じて使い分けるように指導している¹⁰。

b．2つの質問の関係を分析

・カイ二乗検定

二つ以上のグループ間の比の検定（比の比較）を行う。2つの質問ともに「カテゴリーのデータ」である時に使う。結果はカイ2乗のP値を見る。 $P \leq 0.05$ であれば2つのグループ間の比には有意の差がある， $P > 0.05$ であれば比に差が無いと結論する。

多くの留学生はこの検定をよく使う。留学生のアンケートでは，質問の答の種類が「カテゴリーのデータ」であることが多いからである。たとえば，勉強時間の長短¹¹と性差¹²との関係を調べるときなどに使っている。

10 分析方法の指導は，留学生センターの岡澤孝雄教授が主として担当し，筆者も岡澤教授のアドバイスを受けながら指導している。

11 勉強時間1時間未満を「タイプA」，1時間以上2時間未満を「タイプB」，・・・，としておけば，数字のデータではなく，カテゴリーのデータとなる。

12 性差はカテゴリーである。

・ t 検定

2つのグループの平均値の比較を行う。通常は「対応無しの平均値の比較」を使って検定する。一つの質問がカテゴリーのデータ（カテゴリーは2つ：例 男／女，はい／いいえ，等），もう一つの質問が数字のデータ（例 月収，年齢等）の時に使える。3つ以上のグループがあるときはグループを2つずつペアにして検定してゆく。

・ 相関係数と回帰分析

2つの数の間の直線的な関係（比例，反比例）を調べる。使うデータは2つの数字のデータである。一つは説明する変数（ x ：独立変数） もう一つは説明される変数（ y ：従属変数）である。

c. 結論を導く

次に，分析結果を並べて，どの順番で論を展開するか，結論は何であるかを考える。教師は個別にアドバイスする必要があるが，分析の不得意な留学生の場合，何に注目すべきで何を捨象するべきかのバランスがとれず，論の展開がうまくできないことがある。分析結果と異なる結論を無理やり言おうとする者や，不必要なデータに拘る者や，分析結果をすべて述べようとするためポイントが不明になってしまう者などもある。留学生の能力，傾向，性格に応じたふさわしい対応を目指してはいるが，なかなか難しい。

IV．内容を発表の形式に整えるために

ここでは，発表のための「内容」を，口頭発表の形式に仕上げるために本コースで行ってきた指導法について述べる。それは，以下の段階を踏む。

- 1．発表のアウトラインを書く
- 2．発表用スライドを作る
- 3．発表用原稿を書く

1．発表のアウトラインを作る

教科書にある書き方に従って，発表のアウトラインを書く。アウトラインは，テーマ，研究の目的，アンケート調査の方法，調査結果，結果の分析，結論，参考文献を書く。

2. 発表用スライドを作る

発表用ソフトはパワーポイントを使う。

理系の発表では約1分話す内容をスライド1枚に示し、発表時間は10分程度という人が多いが、留学生の場合は日本語を話すこと自体に時間がかかるため、発表時間は15分を目処に、8枚から12～13枚のスライドを作るようにしている。

まず、発表の流れに沿って大きな要点を書く。その要点が一枚ずつのスライドの見出しとなり、要点の数だけのスライドを作ることになる。要点の下に小さな項目を並べる。それが各スライドの内容となる。文字だけのスライドの場合、一枚のスライドの項目数は4つか5つまでとし、行数は10行程度とする。項目は箇条書きにするが、箇条書きの方法は別途指導しなければならない。

スライド作成は、研究発表に慣れた留学生は、論理の展開のしかたや発表スライドに何を書くべきかを知っているため、さほどの困難はないようである。ただし、箇条書きについては指導が必要である。

一方で、コンピュータ操作に不慣れな留学生は大変苦勞する。スライドを作ること自体は「私の国」発表で練習しているが、論理展開のわかりやすい順番、視覚的にわかりやすい書き方、表やグラフの作り方、スライドへの取り込み方などについて、相当の指導が必要である。これは、留学生の専門分野や個人の能力・傾向にも関係しているが、出身国での研究・教育にも関連があると思われる。

3. 発表原稿を書く

最後に、または、スライド作りと同時進行で、発表原稿を書く。発表原稿は、箇条書きではなく、発言するすべてのことを「です・ます体」で書き、パワーポイントをクリックする箇所なども入れる。時にはメモだけでいいという留学生もいるが、外国語（日本語）による発表であるのだから、すべて書くように指導する。

留意点として、「口頭発表は音声で発表する」ということがある。これはあまりにも当たり前のことで、つい気にとめないでいるが、重要なことである。スライドという視覚的な補助が併用されているとはいえ、音声伝達は時系列である。すなわち、聴衆は聞いた順番で情報を得ているのであるから、聞いてわかりやすい順番で話さなければならない。そのことを念頭に置いて発表原稿を書くようにアドバイスする。

次に、留学生自身がよく理解できる文構造と単語を使わせる必要がある。そうしなければ、余裕をもった発表ができない。

また、その留学生にとって発音しにくい単語は別のものに置き換え、文は別の形に書き直させる必要がある。留学生が言いやすい単語と文に行き着くまで、何度でも書

き直す。不思議なことであるが、往々にして最も大切なキーワードに限って、聴衆にとって理解不能な発音をする留学生が多い。それは、キーワードは重要であるので、何度も言う練習をする、そうして練習すればするほど早口になり、自分流の変な発音が定着してしまうのではないかと考える。そのような変な発音を発見するためにも、書いた原稿を音読させ、聞いてわからない箇所は書き直させるという作業を行う。

以上、留学生に発表すべき内容をもたせ、その内容を発表できる形式に整えさせるためにとっている方法を述べた。

V．発表会にむけての準備と発表会本番

1．発音練習

発表原稿読み練習の前に、プロミネンスとポーズを意識した練習を行う。キーワード、固有名詞、専門用語、外国語などにプロミネンスをつける、文と文の間に少し長めのポーズを置くなどである。

次に、発表原稿を音読する練習をする。キーワードにプロミネンスをつけるのが難しい留学生には、キーワードの前後に少しポーズを置いて発音させるなどの工夫をさせる。

2．リハーサル

リハーサルは1回だけでなく、数回行うべきである。聴衆の前で発表する緊張感に慣れること以外にも、多くのメリットがある。スクリーン上に大きく写された画面にデータの間違いや誤字脱字を発見することがある。また、音声、態度、視線、次の画面へ行くためのクリック間合い、レーザーポインターの使い方、発表者交替のスムーズさなどの留学生に関すること、そのほかに、部屋の明るさ、スクリーンの見え具合、照明の当たり方、机の位置、マイクの音量、写真やビデオの出来栄えなどチェックするべきことが多い。

3．発表会本番

本番の日は、留学生の緊張をほぐし自信をもたせなければならない。そのためには、新たな間違いを見つけても致命的でない限り直さず、新たな注意を与えない。一方で、スライドの出来栄えの良さや本人の服装などを褒めて、明るく楽しい雰囲気を作るように心がける。

以上のような指導を綿密な計画のもとに行うことによって、日本語初級レベルでの研究発表を可能にしている。

VI . 今後の課題

発表時の音声の聞きにくさが内容の良さを消してしまう場合がある。それを解決する効果的な音声指導方法を更に研究する必要がある。

また、研究留学生でありながら本プロジェクトの課題を遂行するのに困難を感じる留学生を多数指導してきたが、それは留学生個人の問題というよりも、出身国の大学での研究の方法に関係があるように感じることもある。その点を明らかにできれば、対応策もとれるはずである。

初級レベルの日本語で口頭発表を可能にするための教科書（仮題：『Introduction to Academic Presentation Practice』）の出版を早急に実現したいと思っている。

おわりに

教師の役割は、学生を生かすことにあると思う。留学生自身が最後まで主体的に関わり、力をつけ、達成感と自信をもって、留学の目的である学位取得へと歩き出すこと、それが初級日本語修コースを担当する教師の喜びである。

謝 辞

この口頭研究発表プロジェクトの重要な部分である「分析」指導担当の留学生センター岡澤孝雄教授に感謝の意を表します。

【参考文献】

- ・化学編集部編（1994）『若い研究者のための上手なプレゼンテーションのコツ』化学同人
- ・川口吉太郎他（1993）『上手な学会発表を行うために－Mac と IBM-PC によるプレゼンテーション』秀潤社
- ・樺島忠夫（1992）『文章作成の技術－知的ワープロ・パソコン利用』三省堂
- ・木下是男（1981）『理科系の作文技術』中央公論社
- ・産能短期大学日本語教育研究室編（1996）『研究発表の方法－留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』凡人社
- ・東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編（1995）『日本語 口頭発表と討論の技術－コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』東海大学出版会

- ・東京農工大学留学生センター 越前谷明子 (研究代表者) (1999)『プレゼンテーション能力向上プロジェクト第1回ワークショップ』
- ・東京農工大学留学生センター (2001)『プレゼンテーション能力向上プロジェクト第2回ワークショップ』
- ・富山大学留学生センター編 (2002)『留学生のための日本語コンピュータ』
- ・浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997)『論文ワークブック』くろしお出版
- ・早川幸子・三浦香苗他 (2002)「日本語研修コース修了生の研究活動における日本語使用」『金沢大学留学生センター紀要』第5号
- ・深澤のぞみ (2003)「視覚効果を持つ表現の特徴―留学生のプレゼンテーション支援のために―」『富山大学留学生センター紀要』第2号
- ・富士ゼロックス ドキュメントマネジメント推進室編 (1989)『プレゼンテーションの説得技法』日本経済新聞社
- ・三浦香苗・岡澤孝雄・深澤のぞみ (1998-a)『5ヵ月で口頭発表』(金沢大学留学生センター開発教材)
- ・三浦香苗・岡澤孝雄・深澤のぞみ (1998-b)「初級段階の口頭発表プロジェクト―受信から発信へ―」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- ・三浦香苗他 (1999)「専門教育における留学生の口頭発表(2)使用言語について」『金沢大学留学生センター紀要』第2号
- ・山下早代子・小川早百合 (1994)『インタビュープロジェクト―日本人の価値観発見』くろしお出版
- ・米田由紀代 (2001)『研究報告を書く 理工系専門日本語 作文技法コースⅠ』大阪大学大学院工学研究科・工学部留学生相談室

【資料1】口頭研究発表プロジェクトの概要

対象：大学院予備教育中の日本語初級レベル研究留学生 プロジェクトの種類：アンケート調査に基づく研究発表 プロジェクトの期間と時間：6ヶ月 (17週間) 集中コースの7週目あたりから始める。はじめは週に1コマから2コマを使い、後半はコンピュータ授業の時間も使うので週に4コマから5コマになる。プロジェクトの目的と期待される効果：プロジェクトが専門領域での発表のために役立つことを目的とする。即ち、一般的な研究の方法、口頭発表の言語スタイルを習得し、口頭発表に慣れること、また、コンピュータの利用そのものに慣れ、コンピュータの利便性を活用できるようになることを目指す。

作業項目 1. テーマを見つける：日本人論等の読み物 (英語/日英対訳) を読み、自分で発見したことについてクラスで皆と討論 (英語も可) してテーマを絞る。2. アンケートを作る：何を明らかにしたいかを考えて項目を選び、後のデータ処理のことも考慮して最適な質問と答 (選択肢) を考える。3. 質問紙によるアンケート調査 (日本語) を行う。4. データ入力：エクセルを使用。5. データ分析：度数分布、 χ^2 検定、t検定、相関係数・回帰分析を日本語ソフトを使って行う。6. 考察と結論 7. 発表のアウトライン (英語も可) 8. 発表スライド用箇条書き (日本語) の方法 9. 発表スライド作り (日本語) :Power Point を使用し、図表、写真等を効果的に使う。10. 口頭発表原稿 (日本語) を書く。11. 口頭発表練習：発音・態度も指導。12. 口頭発表

【資料2】留学生の発表題目―平成10年 (1998) 以降のアンケート調査を基にした発表のみ

16期 (平成15年度前期)「金沢市民の EU ヨーロッパユニオンに関する知識」「金大学部生の勉強のしかた」「日本人は誰といっしょに食事をするか」「留学生の存在は日本人学生にとってどんな意味があるか」「大学生活と卒業後の人生の関係」「日本人学生と外国人学生のボディランゲージ」「日本の社会における女性の役割」

*15期 (平成14年度後期)「日本の家族像：子供は叱られなくなったかー『サザエさん』を中心とした漫画

研究とアンケート調査より」

14期（平成14年度前期）「ゴミの分別について金沢市民はどう考えていますか」「金大日本人学生の英語学習に関する調査」「はんことサインのどちらがいいですか」「金大日本人学生の茶髪と伝統文化の関係」「金大日本人学生にとって成功とは何か」

* 13期（平成13年度後期）「『サザエさん』の文末表現にみられる男言葉・女言葉」

12期（平成13年度前期）「死刑制度に関する金沢市民の意識」「若い人の言葉：“あたし”と“おれ”」「日本人の晩婚に対する意識－30歳以降の結婚」「阪神大震災と金沢の家の耐震設計」

* 11期（平成12年度後期）「『サザエさん』の言葉遣いからみた夫と妻の距離感」

* 9期（平成11年度後期）「日本の家族像－夫として父としての男性像」

8期（平成11年度前期）「日本人の長生きのひみつ－金沢の日本人はどう考えているか－」「金沢大学の学生のきつえんのしゅうかん」「わかい日本人のふくそう」「けいたいでんわ」「親友関係について」「もし奨学金をもらったら日本人は留学したいですか」「金沢大学学部生の自習」「日本人の好きなスポーツ」「外国人のための女の子講座」「喫煙と自動販売機の関係について」「ふしぎなパタゴニアについて何を知っていますか」「日本人学生とアルバイトの関係について」

7期（平成10年度後期）「金沢大学の学生および教職員のコミュニケーションの方法について」「日本人の映画の見方」「日本人はラオスをしていますか」「日本人の長生きと生活について」「日本人の好きな音楽とアメリカ文化の関係」「日本人とパチンコについて」「バス利用について」「金大の学生と勉強」「仕事の選択について」「集団見合いとふつうのお見合いについての日本人の意見」「日本人の住居表示に対する考え方について」「血液型と人の性格の関係」「日本人女子大生と外国人について」

6期（平成10年度前期）「日本人の薬の使い方」「金沢の女のひとと家庭」「どうして留学生は日本に来て勉強するのか」「2002年ワールドカップ」「日露関係」「金大生にきいた“いじめ”のたいけん」「日本の働く文化」「日本人と広告」「金大生の原子力発電に関する考え」

* 教員研修生の多い9期, 11期, 13期, 15期には, 「ハイブリッド・ドラマプロジェクト」(アンケート調査に基づく研究発表の中に寸劇を入れていく集団発表)を行った。

Guidance Regarding Contents of the Oral Presentation -Elementary Japanese Questionnaire Research Project-

Kanae Miura

Abstract The Elementary Intensive Japanese course includes an oral presentation of a research project by each student at the end of the course. The student creates a questionnaire based on some topic of personal interest to them, analyzes the data and reports on the results.

The most important aspect of this project is that the contents of each presentation shall be unique and different from other end-of-semester reports. Firstly, the project should involve actual research, rather than merely an informative presentation about some topic with which

the student is already familiar. Secondly, data should be analyzed, rather than simply described.

This paper reports on the step-by-step guidance undertaken in order that the presentation have the desirable contents, and that the contents be in a format appropriate for presentation.

Overall, the following are discussed : in order to ensure the appropriate subject matter for the presentation, the student's project will entail the following steps : preparation, deciding a theme and committing a research plan to paper, creating and distributing a questionnaire, collecting the responses and inputting data, and finally analyzing the data to form conclusions. The contents of this research should then be put in a form appropriate for the oral presentation by means of creating an outline of one's presentation, making Power Point slides, and writing the draft of the presentation itself.

Keywords : Presentation contents, presentation format, oral presentation, questionnaire, data analysis.